

■ 研究ノート ■

空間論的視点からハイブリディティ理論を再検討する ——カリブ海地域からの事例

鈴木 慎一郎
(関西学院大学社会学部)

辻 輝之
(関西学院大学先端社会研究所)

1 序

人文社会系諸学問分野において、文化的アイデンティティの可塑性や流動性や複数性などについての理論的な精緻化を志す動きは依然として活発である。そうしたアプローチには、ある程度便宜的にはあるといえ、「ハイブリディティ理論」という呼び名を与えることができるだろう。この稿は、ハイブリディティ理論を空間論的視点から再検討することがどのように有意義たりうるのか、その可能性を多少なりとも示すことをねらいとしたい。その際の事例としては主に、カリブ海地域英語圏の民族誌学的な知見が言及される。

2 空間論的転回

空間論的視点からの検討を行なおうという際、人文社会系諸学問分野においてやはりここ20年ほどの間の動向である空間論的転回についてふまえておく必要があるだろう。何らかの地理的な境界線によって囲まれた空間があるとして、その内部には単一の等質的な実体が超歴史的に存在する——そうしたあたかも透明な容器のような空間概念からの転換が空間論的転回であり、これによって空間をめぐる歴史性や政治性や諸実践を社会的なプロセスとして考察することが進められていった。

影響力の大きい論者の一人であるアンリ・ルフェーヴルは、空間をめぐる人間の活動や経験を「空間的实践」、都市計画や社会工学の専門家などによる権威づけられた立案や思考を「空間の表象」、そしてそこに身体を置く者たちによる空間の私有化を「表象の空間」と呼んだ。また、「戦略」と「戦術」とについてミシェル・ド・セルトーが行なったよく知られた区別をこの文脈に置くこともできる。全体を一望監視する視座が確保できるような固有の領域を有する者たちがとるのが「戦略」であるのに対して、もともとは自分のものとは呼べない領域にいる者たちが、多様なソースに由来する材料をしばしば「本来」の意図を裏切りつつ流用するプリコラージュ的な実践は、「戦術」と呼ばれた。

こうした空間論的転回において、個別の研究対象として照準を当てられるようになったものは何か。それは「場所」である、と一まず考えることによって本稿は議論を進めたい。日常語でもある

「場所 (place)」という用語が学術的にどのように用いられてきたかについて、「空間」「居場所」「場」などとの関係をふまつつきちんと整理するための準備は、残念ながら現在の筆者にはない。そのことを断わっておいた上で、ここでは遠城 (1998) による場所の捉え方を、一定の指針をもたらしてくれるものとして取り上げたい。それによれば、一つの場所とは、人間とのあいだに超歴史的で無媒介的なつながりを有しているのではなく、あくまで政治的経済的諸交渉を通じて構築されるものであるが、かつそれは、他の場所との関係性の中で一定の物質性、具体性、安定性、(デヴィッド・ハーヴェイのいうところの)「構造づけられた固有性」をも有する。そしてそうした場所にあたるものとしては、「個人の身体が占める場からローカルな共同体、都市、地域、国民国家に至るまで」(遠城 1998, p.228) の、さまざまな空間スケールにおける範囲を論じることができるという。

この意味でいうならば、カリブ海地域という一つの「地域 (region)」もまた、場所として考察することが可能であるはずである。それは、植民地支配や新大陸奴隷制などの歴史を通じて、近代世界システムの中の一つの周辺として、かつ混成的なものとして作られてきた場所だといえる。

3 ハイブリディティ理論にとってのカリブ海地域という場所

上に述べた二つの学的潮流、すなわちハイブリディティ理論と空間論的転回は、文化をめぐる本質主義的な理解に対しての批判を互いに分かち有している。ところで近年の人文社会系諸学問や批評理論や学術ジャーナリズムにおいて、本質主義批判を端的に表すような鍵用語としてしばしば用いられてきたのが「クレオール」や「ディアスポラ」であり、そしてその際にカリブ海地域は、クレオールやディアスポラのいわば「原産地」ないしは「主産地」(こうした言い方自体がきわめて逆説的であることに注意してほしい) の一つとして目されてきたふしが、確実にある。

クレオールやディアスポラ概念を脱文脈化することの危険については、すでに多くの論者が次のような指摘を行なってきた。つまり、単一の血統や単一の土地に縛られない自由な主体の称揚が、所詮はいわゆる先進諸国発の言説であるポストモダンの文脈でなされる時、実際の混成化や居場所剥奪を植民地や元植民地において進行させた暴力的な歴史が忘却されてしまいかねない、というのである。

さらに言えば、事態はもう少しねじれている。一般に、学的言説の生産や流通や消費に関してもその脱中心化や多中心化が進んでいると指摘されるようになって久しいが、西欧諸国のアカデミズムが他の諸地域のそれと比べて有している権威はやはり完全には否定しきれないものとしていまだにある。そして、学的流行としてのクレオールもディアスポラも、やはり西欧諸国のアカデミズムを経由してのものであった。そのためか、これらの流行を経た現在では、カリブ海地域の国々に拠点を置く研究者たちのがわから、カリブ海地域という場所の固有性をクレオールやディアスポラという語で(しかも、外部に対する肯定的な自己イメージをそこに重ねつつ)積極的に代表させよう、という選択がなされているよううかがえる。これは、カリブ海地域内の大学で開催される国際的なカンファレンスの類いの、趣旨文などを読んでの印象である。こうした選択には、ネオリベリズムの中で大学や学問分野や研究者が生き残りのためにとる一反応、という面がおそらく確実にあると思われる。それは現在の日本国内において大学がそれぞれの立地する地域との連携をアピール

している姿と、同種のものなのかもしれない。

このような意味でカリブ海地域は、クレオールまたはディアスポラに関しては地球の中でも特権的な場所の一つとして構築されているといえる。ところで、カリブ海地域に関連づけられた形でクレオールやディアスポラが話題にされる時に、大抵の場合そこで引き合いに出されるのは、同地域の現在の住民の祖先にあたる者たちと、「アフリカ」「ヨーロッパ」「インド（亜大陸）」「中国」などといった地理的空間とのつながりである。これらの地理的空間は、カリブ海地域における混成化に先行して存在する、それぞれにおいて一枚岩的で純粋な起源群として想像されているように思える。そのかぎりにおいては、これらの「アフリカ」「ヨーロッパ」「インド」「中国」等などについて、先ほど述べた具体性を有したのものとしての場所という概念をあてはめることは、やはりためらわざるを得ない。またこうした想像の様式は、学的言説だけでなく現地の人々の語りからもしばしばうかがえるものである。もちろん、カリブ海地域の大学知識人たちが、同地域に連れて来られたアフリカ系集団の内的多様性について一定の理解を有していることは、言うまでもない。ただしクレオール化という時にはやはり、「アフリカ」「ヨーロッパ」「インド」「中国」等などの文化的諸起源が互いに交わるという形での混成化を、第一義的には指しているようにみうけられる。

ハイブリディティ理論がもたらしてくれた刺激の一つが、混成化に先立つ純粋な起源という考え方そのものを疑問に付してみせたことだとするならば、われわれは、クレオールやディアスポラの「本場」(?)であるはずのカリブ海地域で遭遇する、「純粋な起源」という想像の様式と、どう折り合いをつけていけばよいのだろうか。少なくともいえるのは、「純粋な起源」という想像の様式だけがそこにある全てである、などと最初からかかってしまっただけとはいえないということである。

4 〈現場〉グローバリゼーションが示唆するもの

この文脈で示唆をもたらしてくれるものとして、唐突に思われるかもしれないが、米国の文化人類学者イアン・コンドリーによる、日本のヒップホップについての著書（コンドリー 2009）を挙げたい。彼によれば、文化のグローバル化に関する従来の研究においては、研究者が固執してしまいがちな、相互排他的な二項図式のセットというものがある。それは〈外来のもの〉対〈土着のもの〉であったり、〈生産〉対〈消費〉であったり、またラップのような表現文化の場合には〈商業主義〉対〈アンダーグラウンド性〉という図式もある。先行研究のこうしたあり方に対してコンドリーは、一連の二項対立が、ナイトクラブや音楽スタジオといったそれぞれの固有な名で呼ばれる具体的で物理的な空間において、ラップ音楽のアクターたちの行為遂行性を通じて、固定化されることなく不断に組み直されていくさまを記述してみせた。日本のラップの担い手たちが「現場」という語を好んで用いることから、コンドリーは上述のプロセスを「〈現場〉グローバリゼーション」として捉えた。彼によれば、〈現場〉グローバリゼーションは、(先進国とりわけ米国に発する強大な消費文化が地球全体を覆って均質化するという意味での) グローバリゼーションの捉え方とは異なる。また、(外来の文化が土着の「したたかな」主体によって現地化されていくというプロセスをあらかじめ決定ずみとするような) グローカリゼーションの捉え方も異なる。

コンドリーのこの研究は、この稿の視角からすると、少なくとも次のような示唆をもたらしてく

れるように思える。つまり、グローバル化した世界における文化と場所との関連づけを考察する際には、複数の空間スケールを念頭に置かなくてはならないという点である。すなわち、ラップ音楽の実践にとっての現場にあたるクラブやスタジオなどの物理的空間、それから、ある程度の対面的ネットワークの及ぶ空間としての街や都市や「地元」、そして、当の音楽の地理的・民族的ルーツとして想像されることのある他国の社会（ラップの場合、その一つはアフリカ系アメリカ人の社会）といった諸スケールである。

この示唆をふまえ、われわれにとって考察の余地があると思われる問いを曖昧な形ながら立ててみるならば、次のようになるだろう。コンドリイがいう意味での現場に相当するものをカリブ海地域に関する民族誌学の知見から挙げると、サウンドシステムを用いて行なわれるダンスの会場や（植民地主義に対する抵抗の場所としてしばしば理想化されてもきた）ストリートなどがすぐに連想されるが、それ以外に教会や儀礼場などもここに加えて考えることができるかもしれない。では、現場としての場所への感覚は、前述した「アフリカ」「ヨーロッパ」「インド亜大陸」「中国」などといった、より抽象化された地理空間についての感覚と、どのような関係に置かれるのだろうか。

こうした問いをふまえ、以下では旧英領のトリニダッド島におけるある場所をめぐる実践が検討される。

5 ウッドフォード広場大学 (University of Woodford Square)

「引っ込め！お前には、論じること (talk it out) なんても出来やしないよ。事実 (fact) に基づかない話をいくら続けたって、議論を台無しにするだけさ。情報 (data) を収集して出直してこい」。彼は、通りを挟んで建っている図書館を指差すと、先ほどから熱弁を振っていた男に向かってそう言い放った。

2009年7月某日、「大学」における一場面。これが、俗にステレオタイプ化される高等教育機関



としての大学であれば、独善的な持論ばかりを繰り返す学生を教師が宥めた、といったところだろう。しかし、この「大学」には、カリキュラム、教科書はなく、教師もいない。「いつ」、「誰が」、「何を」提議し、発言するかについて成文化された規則や制限はない。「何か起こると」、あるいは、「何か起こっていないか確かめるために」、人が集まり、「講義」や「討論」が始まる。しかし、「大学」での「講義」や「討論」である以上、「どのように」語るかが問題とされ、聴衆は、話者に対して、常に「事実」や「情報」の提供を求める。実証を踏まえた主張は、評価され、逆に、単に思考や感情による主張は、議論の流れを絶ち、その価値を落とすもの (mash-up talk) として非難される。実証的な議論を積み重ねる話者は、個別の分野に精通した「歴史家」や「コメンテーター」

などと呼ばれ、更に見識に富み、論証的議論を永く展開する者は、「弁証家 (Dialectician)」や「哲学者 (Philosopher)」などの敬称を得て、「講義」には、多くの聴衆を集めるようになる。あくまで自発的で、かつ非組織的でありながら、ここでの議論が日常繰りかえされる雑談から区別され、一定の連続性と「正統性」を帯びるのは、それらが起こる「場所」、つまり、この「大学」を境界づける歴史性、政治性であり、歴史的に積み重ねられ、構造づけられた具体性にある。

5-1 現場、ウッドフォード広場

ウッドフォード広場は、カリブ海の島国トリニダッド・トバゴの首都ポート・オブ・スペインのまさに中心に位置する。広場を囲む通りは、官公庁舎、企業オフィス、商店が隙間なく立ち並び、「近道」として広場を横切る人の流れが一日中途絶えることはない。中心に在る噴水から放射状に伸びた通路に沿って整然と植えられた木々は、昼間の照りつける太陽を遮り、ベンチに腰掛ける人たちに束の間の「避暑地」を提供している。コンクリート製の備付テーブルは、退職者か失業者か、とにかく、ほぼ毎日のように来る「常連」が占居し、一日、賭けチェスやブリッジに興ずる。そんな人を目当てに、露天が並び、行商人が行き交い、聖書片手の布教者が立つ。広場の風景は、何処にでも見られる、何の変哲もない都市の「憩いの場」である。

しかし、この広場は、トリニダッド史の転換点である重要な事件の「現場」となってきた。まず、広場は、英国統治下のトリニダッド (1802 ~ 1962 年) で、最も永く総督の座に在った人物、ラルフ・ウッドフォード卿 (Sir Ralph Woodford) からその名を受けている。西側から広場を見下ろす大きなヴィクトリア式建築、通称“Red House”は、現在、国会議事堂として利用されているが、元々、1840 年代に植民行財政府として建設された。広場の南側には、1823 年の完成から今日まで、アングリカン、すなわち英国国教会派の「本拠」、「Mother Church」であるトリニティ大聖堂 (Trinity Cathedral) が聳え、毎日昼時には、礼拝の荘重な音楽が広場に届く。統計によれば、英領となった当時のトリニダッドの人口、約 2.5 万人のうち 9 割は、カトリック教徒であり、教育や婚姻など重要な社会制度は、カトリックの教義、信仰に適合するものが実践されていた。英国によるトリニダッドの植民は、政治的管轄権の確立だけではなく、カトリック教会の支配下に在った社会制度を「アングリカン化 (Anglicization)」する大規模な思想変革でもあった。ウッドフォード広場は、政治経済を掌る行財政府と、それを思想的に補完する英国国教会という英国植民統治の最たる表象に囲まれている。

しかし、20 世紀に入ると、広場は、反植民地、反帝国主義の表象へと転化していく。砂糖プランテーション、つまり著しく労働集約的作物の大規模栽培を可能にした労働力の商品化と、その徹底的な監視・管理には、暴力による身体の統制だけではなく、非西欧地域からの移民を特徴づける文化的要素を選択し、その異質性と「西欧」との差異を「所与」、よって「不変」のものとして階層的に固定する人種／文化的「他者」の言説が理論的な根拠を与えた。しかし、人種化された文化間の距離を最も恐れていたのは、その言説によって、人種・文化の垣間に被統治性を確立しようとした植民地エリート自身であった。この恐怖感は、ある意味、トリニダッドのエリート層に特に強かったと言える。何故なら、トリニダッドに住む黒人、混血は、元々、仏領からの移民であり、英国領となって久しいトリニダッドで、フランス語を基調とするパトワを操り、カソリック教会に帰

依する彼らの存在は、おぞましい「ハイティ」の記憶を呼び起こした。実際、1880年代、トリニダッドを訪れた著名な英国人作家は、その旅行記において、「第二のハイティ」が誕生し、無一文で追い出される前に逃げるべきだ、と同島に住む英国人に警告を発している。

植民エリートの間に、この「予言」の信憑性が一気に高まるのは、1903年、水道料金の値上げに反対する労働者、貧困層がウッドフォード広場を埋め尽くしたときである。怒りを露わにする幾千ものデモ参加者を前に、行財政府は、値上げの延期に追い込まれる。この事件をきっかけに、主に黒人である都市労働者の組織化と政治的動員が加速し、その中で、広場は、眼前の植民行財政府と対置される「民衆議会 (People's Parliament)」として度々利用されるようになる。

1930年代、世界恐慌の影響による失業率の悪化と賃金の低下は、カリブ海地域全域で激しい労働争議を誘発し、トリニダッドでは、1937年、全国的規模のストライキやデモに発展した。この時、運動を率いたリーダーが、演説の場として選んだのも、ウッドフォード広場であった。プランテーションを土台に形成された社会では、歴史的に、人種／エスニシティによる個人・共同体の分類と、階級、職業、居住地域など社会経済的な区分・階層の相関関係が構造化し、その結果、人種／エスニシティのアイデンティティが個人の政治経済的利害、生活様式、社会資本の形成を規定してきた。労働組合も例外ではなく、特定業種の労働者の利益を代弁する各組合は、結果的に特定の人種／エスニック・グループを代表していた。しかし、1930年代の労働運動が、人種／エスニシティを横断する労働者の大同団結、国家独立に向けた動員を可能にしたのは、この広場が象徴していた反植民主義、反帝国主義の語りであった。

5-2 エリック・ウィリアムズ

1955年、ウッドフォード広場に設けられた演壇を、興奮した聴衆は取り囲み、ある人物の登場を待っていた。のちにトリニダッド・トバゴの初代首相となるエリック・ウィリアムズ (Eric E. Williams) である。ウィリアムズは、1911年、ポート・オブ・スペインで、黒人の父とフレンチ・クレオール (フランス人入植者の人種的・文化的伝統を受け継いでいるとされる現地生まれの人々) の母の間に生を受けた。トリニダッドで唯一の公立エリート校であったクィーンズ・ローヤル・カレッジで優秀な成績を収めた彼は、1932年、奨学金を得て、英国オックスフォード大学に留学し、1938年に博士号 (歴史学) を取得、その翌年には、早くも米国ハーワード大学の教壇に立っている。その後、カリブ海地域に属領、植民地を持つ米国、英国、フランス、オランダが共同で設置した「アングロアメリカン・カリブ諸島委員会」 (以下、委員会) の委員に就任し、1948年、その副議長として、留学後、初めてトリニダッドに帰国する。

ウィリアムズは、「歴史家」また「思想家」として、既に国際的な地位を確立していた。彼の博士論文と、それを加筆、出版した『資本主義と奴隷制 (Capitalism and Slavery)』 (1944) は、アフリカの労働力を利用した奴隷制プランテーションが米州で興り、やがて衰退していったのは、あくまでも経済的比較優位の変動に依るという議論を展開した。彼の議論は、独自の「ウィリアムズ・テーゼ」として、植民地、奴隷制に関する歴史研究に多大の成果をもたらすとともに、その唯物史観は、その人種／文化的属性から、生来、奴隷に適していたという言説から黒人を解放する思想として、汎アフリカ主義の中に取り込まれていく。

しかし、「政治家」としての彼は、トリニダッドにおいて、全くの無名であった。トリニダッドを含む英領カリブでは、1930年代の労働運動を率いたリーダーが、その後、労働組合を母体にして大衆政党を結成し、植民地の独立を目指していた。ウィリアムズは、この重要な国内政治の転換期に、下層労働階級から地理的、政治的に最も離れたところに身を置いていた。実際、1948年に帰国したとき、彼には政治家としての道を歩んでいく考えはなかった。しかし、1955年、英国が、宗主国に対する批判を繰り返していたウィリアムズに「委員会」からの辞職を勧告したことを受けて、一転、反植民地主義の理念を、今度は「政治家」として、トリニダッド・トバゴの独立という形で実践することを決意する。そして、翌1956年、それから一年もたたず実施された選挙で、ウィリアムズ率いる新党、人民国家運動（PNM）は、立法府の多数議席を獲得、彼は自治政府の首班指名を受ける。

「政治家」ウィリアムズの劇的な登場を可能にしたものは何だったのか。繰り返し議論されてきた問いであり、ここでは、本稿の主題である「場所」に引きつけて指摘するに留める。1955年のこの日、ウィリアムズは、ウッドフォード広場で、「委員会」、終身教授の地位に在ったハワード大学から辞職し、政治家へ転身することを宣言する。この重要な転向点、政治家としての起点をウッドフォード広場に置いたことで、ウィリアムズは、この場所が表徴していた労働運動から反植民地、独立闘争へと続く歴史の外延に自らを矛盾なく位置づけ、その結果、そこに内包されていた政治性を目標に向けて動員することに成功した。

5-3. 「〈大学〉教育」の実践

ウィリアムズは、この日の演説を、次の言葉で締めくくった。「今後、私が講義を行う大学は、ここウッドフォード広場大学だけである」。翌朝の新聞も、この集会について、以下のように報じている。

地方議会議員、活動家、ボランティア、女性運動家、上官と下級兵士、靴職人、仕立屋、見習工や日雇い労働者、主婦、家政婦、幾千に及ぶ下層労働階級、カーニバルマス・バンドのリーダーやスティール・バンドのメンバー等々。1955年の最も長い日、盛大な大学の開校には、あらゆる人たちが顔を揃えた。

しかし、博士号を持ち、実際に大学教授であった政治家の登場を、「大学」という修辞を以て表現したメディアと、「大学」という言葉を確かな意図を以て使ったウィリアムズの間には、恐らく大きな隔たりがあった。

「政治家」ウィリアムズが、一貫して強い関心を寄せていたのは、教育改革であった。彼は、政治家としての道を歩むことを決意する以前に、トリニダッド・トバゴを含め、英領西インド諸島の経験と文脈に適した教育とは如何にあるべきか、についての考えを『英領西インド諸島における教育（Education in the British West Indies）』（1950）という本に纏めている。この本の中で、ウィリアムズが「最も重要かつ啓発的な手本」と位置づけたのは、「メキシコにおける教育革命」（同第2章）であった。1920年代、革命後のメキシコで、民族主義的知識人とテクノクラートは、経済開発による格差の是正以上に、それまで一握りのエリートによる統治を可能にしてきた言説、因習、

秩序から被支配層を解放する「教育」に力を注いだ。同様に、ウィリアムズにとって、「教育」とは、狭義の「学校教育 (schooling)」ではなかった。1961年、ウッドフォード広場に立ったウィリアムズは、集まった聴衆と、ラジオの前の国民に向かって、「支配者の時代は終わった (Massa Day Done)」と高らかに宣言する。彼にとって、植民地支配の終焉とは、一年後に控えていた政治管轄権の移譲を意味するものではなく、個人の言動を規定していた思想、意識を「教育」によって変革することを以て定義されるべきものであった。

支配者は、人種による不平等を信じた。人民国家運動 (PNM) は、ここに宣言する。如何なる困難に直面しようとも、いかなる努力が必要となろうと、われわれは、人種言説による野蛮な支配に立ち向かい、異なる人種の団結をこの社会の基礎とすることを。支配者は、彼が支配する社会を教育することを拒み続けた。何故なら、「教育は、人間を解放する (To educate is to emancipate)」からである。

ウィリアムズは、この広義の「教育」に資する「大学」について明確な考えを持っていた。既に、1948年、宗主国主導によって、英領西インド諸島を対象とする広域大学、西インド諸島大学 (The University College of the West Indies、以下 UCWI) が設立されており、その主要なキャンパスの一つをトリニダッド・トバゴに建設することも決定していた (1960年に開校)。しかし、ウィリアムズにとって、英国ロンドン大学の「分校」の性格が強く、その組織やカリキュラムを模倣することで、学歴エリートを生み出そうとする UCWI は、「西インド諸島の生活、文化に不適合」な教育機関であった。先述の著書『英領西インド諸島における教育』によれば、トリニダッド、西インド諸島に必要な「大学」は、第一に、植民地主義の思想的影響を受けている「成人の再教育機関」でなくてはならず、そのためには、「無償」で教育を提供することは勿論、文脈化された教材、議題、指導法を採用し、更に、特定のキャンパスを持たず、教育対象とするコミュニティに出向いていく「移動性」を持たなくてはならない。つまり、ウィリアムズにとって、ウッドフォード広場大学は、単に名目的な修辭としての「大学」ではなく、具体的な教育政策を実践する場であった。

ウッドフォード広場大学での、ウィリアムズの「講義」は、彼が博士論文で精査した植民地主義、奴隷制プランテーションと英国産業革命との関係から、人種、宗教間の共生など、トリニダッドが置かれた文脈に関わりのあるテーマを取り上げた。しかし、十分な教育を受けてこなかった下層労働階級である「学生」にとって、これらは、過度に専門的な主題であったと言える。しかし、「Massa Day Done」の寸言に象徴されるように、トリニダッド特有の、特に労働者階級の俗語、言回し、アクセントを意識的に配した「講義」は、多くの「学生」が「発話者」として対話に参加すること、更に、彼らが自らの境遇を、より大きな空間、時間軸に照らして理解することを可能にした。

ウィリアムズによる「知」の大衆化は、独立後、「大学」に更なる移動性を与えることで加速していく。彼は、都市に住む労働者への「教育」がある程度成果を収めた、という確信から、今度は、道路などのインフラが整備されておらず孤立している村落地域を「大学」を設置する場所を選んだ。「メキシコの教育革命」で、彼が特に注目したのは、「文化ミッション (Cultural Mission)」と呼ばれる取り組みであった。当時、メキシコ革命の指導者は、賛同する知識人、教員を多数登用し、地域、コミュニティを選択して派遣した。このとき、重点的に「教育」の対象となったのが、都市下

層労働階級と村落小作農であった。従って、政敵にとっては、政党の支持基盤を拡げるための「遊説」も、ウィリアムズにとっては、「公衆教育 (public education)」の一環であり、政党集会ではなく「大学」、演説ではなく「講義」であった。

5-4 結語にかえて—「場所」の非従属性

ウィリアムズの「教育」理念、その実践が、ウッドフォード広場に、「大学」という新たな属性を生んだ。しかし、生産された「大学」という「場所」が、常にウィリアムズの政治的意図、戦略によって管理、統制され、一部で批判されているように、「集票装置」として流用されたわけではない。事実、彼の「教育」が「学生」に植え付けた実証主義的態度と、それによって高められたウッドフォード広場の批判性は、首相となったウィリアムズに対して発揮されることになる。

1970年2月、カーニバルが終わって2週間。例年であれば、カーニバルの放埒が嘘のように、国が静まり返る時期である。しかし、この年、ポート・オブ・スペインの街は、再び「パレード」をする人たちが埋め尽くされた。彼らは、派手な衣装を身につけているわけではなく、音楽に身を委ねているわけでもない。その代わりに、手にウィリアムズや与党PNMに対する不満を綴ったプラカードを持ち、皆口々に叫んでいた—「権力、権力、人民に権力を」。当初、デモは、UCWIの教員と学生が中心であったが、いつの間にか、主役は、都市に住む低所得労働者や貧困者となっていた。(旧)英領カリブでは、1960年代後半からの経済停滞が、独立によって高まっていた期待感の反動を呼び、各地で暴動などが頻発していた。地盤である労働組合の要求に応じて、次々と左傾化していった指導者と異なり、ウィリアムズは、従来の経済政策を堅持、外国資本誘致による経済開発を進めたことで、最も熱狂的な支持層であった都市労働者階級の不満を爆発させた。首都でのデモは、一旦収束するが、その後、労働組合の支持を得て、数か月に及ぶゼネストに発展し、ウィリアムズは、政策の大幅な見直しを余儀なくされる。この間、ウッドフォード広場大学では、連日、ウィリアムズに異を唱える知識人、政治家、労働組合の指導者が「講義」に訪れ、「学生」と「討論」を繰り返した。彼らは、かつてのウィリアムズ同様、広場が内包していた歴史性と政治性、「反権力」の象徴としての具体性を自らの政治的目標に向けて動員した。しかし、ウッドフォード広場が、反ウィリアムズ運動の中で象徴的役割を果たしたのは、その「場所」が体现していた批判性であり、その批判性を、「大学」に見立てられるほどに高めたのは、ウィリアムズ自身の「教育」実践であったことを忘れてはならない。

「教育とは解放なり」。ウィリアムズが、「教育」を通して大衆を「解放」しようとしたもの、それは、植民地支配そのものではなく、その下で深く埋め込まれた心的傾向、社会的人格であった。その中でも特に、彼は、思考や行動を「人種」という概念によって規定されない「公衆 (public)」の創造を企図していた。ウッドフォード広場大学の「学生」は、その多くが解放奴隷を祖先とする黒人の下層労働階級であり、人種言説の否定的影響を最も受けていた、という前提に立って、ウィリアムズは、あえて、その中に、人種概念に左右されず、科学的、実証主義的な合理性と客観性を発揮する「公衆」の軌範を生み出そうとする。しかし、政治的意図、政治工学による「場所」の選択、領域化と、その中に「非植民地化」した理想の人間を創造しようとする試みは、別のスケール、例えば、トリニダードやカリブというより大きな空間で歴史的に構造化されてきた具体性と無関係に達成す

ることは出来なかった。「場所」間の交渉、対立が生み出したものは、ウィリアムズが否定していた植民地主義、人種概念によって、その言動を完全に制御、操作された人間でもなく、また、それらから完全に「解放」され、人種を非科学的「幻想」として客体化できる近代主義的人間でもなかった。

今日もウッドフォード広場大学では、「講義」、「討論」が行われている。今も昔も、「学生」の大半は、ポート・オブ・スペインとその近郊に住んでいる、あるいは、そこで働いている黒人労働階級であるが、人種／エスニシティが、暗黙の要件として、「講義」、「討論」への参加や、そこでの発言を制限することはない。先述したように、「誰が」ではなく、「どのように」発話されるか、に重点が置かれ、評価の基準となる。しかし、これは、「大学」での「講義」、「討論」の実践が、権威的な人種／エスニシティの言説から自律していることを意味しない。「大学」においても、人種／エスニシティの言説は、議論されることのない自明の前提として、発話者の位置性 (positionality) を定義し続けている。

「大学」で多くの「学生」を前に、非キリスト教の宗教について「講義」していたアフリカ系の男は、それを遠巻きに観察していた日本からのフィールドワーカーに声を掛けた—「おい、そこの中国人！ お前を差し置いて、仏教について語る度胸はないよ。こっちに来て、仏教についてこいつらに教えてやってくれよ」。



[付記] 本稿は、関西学院大学先端社会研究所から支援を受けた共同研究「空間論的視点からハイブリディティ理論を検討する——カリブ海地域を事例に」からの成果を鈴木および辻が研究ノートとして共同で執筆したものである。執筆の分担は、第1節から4節までが鈴木、第5節が辻による。なお、本文中に掲載された写真は、辻撮影による。

参考文献

- 遠城明雄 (1998) 「「場所」をめぐる意味と力」, 荒山正彦・大城直樹 (編) 『空間から場所へ 地理学的想像力の探求』, 古今書院, 1998年, pp.226-236
- コンドリー, イアン (2009) 『日本のヒップホップ 文化グローバリゼーションの〈現場〉』 上野俊

- 哉・監訳, 田中東子+山本敦久・訳, NTT 出版 (Condry, Ian. 2006. *Hip-Hop Japan: Rap and the Paths of Cultural Globalization*. Duke University Press)
- Anthony, Michael. 1997. *Historical Dictionary of Trinidad and Tobago*. Lanham, MD: Scarecrow Press.
- Cudjoe, Selwyn R. 1993. Eric E. *Williams Speaks: Essays on Colonialism and Independence*. Wellesley, MA: Calaloux Publications; distributed by the University of Massachusetts Press.
- Froude, J. A. 1888. *The English in the West Indies*. London: Longmans.
- Sutton, Paul K. 1981. *Forged from the Love of Liberty: Selected Speeches of Dr. Eric Williams*. Port-of-Spain, Trinidad and Tobago: Longman Caribbean.
- Tsuji, Teruyuki. 2006. *Hyphenated Cultures: Ethnicity and Nation in Trinidad*. Diss. Florida International University.
- , 2008. "Villaging the Nation: The Politics of Making Ourselves in Postcolonial Trinidad." *Callaloo: A Journal of African American Arts and Literature*. 31(4): 1148–1174.
- Williams, Eric E. 1994. *Education in the British West Indies*. Brooklyn, NY: A & B. 1950.
- , 1994. *Capitalism and Slavery*. Chapel Hill, NC: University of North Carolina Press. 1944.
- , 1969. *Inward Hunger: The Education of a Prime Minister*. London: Deutsch.
- Winer, Lise. 2009. *Dictionary of the English/Creole of Trinidad and Tobago*. Montréal, Canada: McGill-Queen's University Press.

